日曜礼拝（復活後第五主日）　　2026.5.10

「イエス様の約束を待ち望む群れ」　使徒言行録１：１２～２６

Ⅰ導入部

おはようございます。５月の第二日曜日を迎えました。今日も愛する皆さんと共に礼拝をささげることができますことを感謝致します。ゴールデンウィークも終わり、お疲れが溜まった中の、お仕事、勉強は少々疲れ気味といったところでしょうか。今日は５月の第二日曜日、「母の日」です。日ごろからお母さんには感謝すべきですが、今日は特にお母さんに、感謝すべき日です。母親として長い間、子どもたちを愛し、育て苦労して下さった方々に心からの感謝を現したいと思います。今、母親として子育て真っ最中のママたちにも心からの感謝を伝えたいと思います。いつもありがとうございます。はずかしくて、いつもお母さんに感謝できない方々は、今日は母の日ですから、感謝できるのではないでしょうか。お母さんの好きなものをプレゼントするとか、今日はお母さんに代わって、食事、洗濯、掃除をしてあげるということもありかなと思います。どんな形であれ、今自分にできることがあればいいですね。

さあ、ゴールデンウィークも終わり、仕切り直しで２０２６年度の歩みに、お仕事、勉強、生活にしっかりと歩ませていただきたいと思います。次はお盆休みがあり、９月には５連休があります。そこまで頑張りましょう。毎週の礼拝が心と体の休息になれば感謝ですね。今日は、使徒言行録１章１２節から２６節、先週の続きの箇所になりますが、「イエス様の約束を待ち望む群れ」と題して話し致します。

Ⅱ本論部

一、イエス様の言葉に従って共に集い祈りをささげた

弟子たちは、イエス様が天に上られてから何をしたのかと言うと聖書は、１２節から１４節には、「使徒たちは、「オリーブ畑」と呼ばれる山からエルサレムに戻って来た。この山はエルサレムに近く、安息日にも歩くことが許される距離の所にある。彼らは都に入ると、泊まっていた家の上の部屋に上がった。それは、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、フィリポ、トマス、バルトロマイ、マタイ、アルファイの子ヤコブ、熱心党のシモン、ヤコブの子ユダであった。彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた。」とあります。「エルサレムに戻って来た。」とあります。彼らはイエス様のご命令、「**エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。**」（使徒言行録 1:4）や「わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどっていなさい。」（ルカ 24:49）というご命令に忠実に従って、都、エルサレムに戻ってきたのです。イエス様が天に上られて先行きの見えない現状ではありました。しかし、彼らにはイエス様の約束の言葉があったのです。約束の言葉を信じて、イエス様の語られた通りに行動したのです。イスカリオテのユダ以外の１１人の弟子の名前があります。婦人たちやイエス様の母マリアさん、イエス様の兄弟たちと何をしていたかというと「心を合わせて熱心に祈ってい

た。」のです。弟子たちにとっては理解できない事も多くあったでしょう。しかし、理解するよりもイエス様の言葉に従うことを優先したのです。イエス様がいなくなって不安や心配があったでしょう。心細かったでしょう。しかし、弟子たちは、不安や心配に捕らえられるのではなくて、イエス様に対する信頼を優先しました。自分たちの計画、何をするのかではなくて、イエス様の言葉に従って行動することを優先したのです。私たちの信仰生活の中にも、現実の中で、信仰を持っていても恐れや不安が常にあるのでしょう。自分の願いや自分のしたい事を優先してしまうということもあるでしょう。イエス様は、自分の考えや経験、自分の才能に従って行動することよりもイエス様の言葉に従って行動することを願われます。イエス様の言葉に従順に従い行動する者に、次の道を示して下さるのです。「彼らは都に入ると、泊まっていた家の上の部屋に上がった。」とあります。弟子たちと婦人たち、イエス様の母と兄弟たちは、一つの所に集まったのです。散らばることなく、一つの場所に集まりました。イエス様が捕らえられた時、弟子たちは散らばりました。バラバラになりました。しかし、復活されたイエス様との出会いが、彼らを一つにしたのです。キリスト教会という所は、完全な人、優秀な人が集まる場所ではなくて、イエス様に呼び戻された人々が、同じ場所に集められる共同体なのです。罪を犯し、失敗し、落ち込み、全てを失うことを経験した者たちが、イエス様の十字架と復活、福音を通して呼び集められた者の集まりが、キリスト教会なのです。「彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた。」とあり、リビングバイブルには、「使徒たちは、泊まっていた家の二階で、祈り会を始めました。」とあります。弟子たちは、祈りの場に戻ったのです。祈りは、ただ願いを並べる行為ではなく、神様の御心に心を合わせていく行為です。教会の力は、人数でも、財力でも、活動量でもなく、祈りを通して神の力に結びつく**こと**にあります。

これは私たちの信仰の歩みにとても大切なことです。私たちが人生の転換点の時、進学、就職、結婚、出産等、大切な場面に遭遇します。その時、どこに帰るのか、戻るのかということはとても大切な事です。弟子たちは、祈りの家に戻ったのです。どんな時も、必ず祈りに戻る、祈りに立ち返るというのが、キリスト者の歩みなのです。あなたは、今祈りに立ち返るべき時、祈りに戻る時ではないのでしょうか。私たちは、不安な時こそ、祈りの場に戻るべきであり、ひとりで祈るよりも共に心を合わせて祈るのであり、自分の思いや願いではなく、神様の御心に合わせて祈る祈りなのです。まさに定例の祈祷会ですね。

二、人間の失敗や罪が、神様のみ業の妨げにはならない

共に集い、ささげる祈りは、心を合わせる祈りであり、継続する祈りであり、イエス様の約束の言葉を信じて祈る祈りでした。祈りとは、何もしない期間ではなくて、神様の働きが始まる、ここでは聖霊の働きが、降ることの始まる最も重要な準備なのです。１４節の後半を詳訳聖書には、「待機しながら、全く心を一つにして、ひたすら祈りに励んでいた。」とあります。１５節には、「そのころ、ペトロは兄弟たちの中に立って言った。百二十人ほどの人々が一つになっていた。」とあります。リビングバイブルには、「この祈り会は数日間続きました。ある日、百二十人ほども集まっていた時、ペテロが立ち上がり、次

のように提案しました。」とあります。祈りをささげる中で、祈り会の中で、ペトロが語りました。１６節からです。「「兄弟たち、イエスを捕らえた者たちの手引きをしたあのユダについては、聖霊がダビデの口を通して預言しています。この聖書の言葉は、実現しなければならなかったのです。ユダはわたしたちの仲間の一人であり、同じ任務を割り当てられていました。ところで、このユダは不正を働いて得た報酬で土地を買ったのですが、その地面にまっさかさまに落ちて、体が真ん中から裂け、はらわたがみな出てしまいました。このことはエルサレムに住むすべての人に知れ渡り、その土地は彼らの言葉で『アケルダマ』、つまり、『血の土地』と呼ばれるようになりました。詩編にはこう書いてあります。『その住まいは荒れ果てよ、そこに住む者はいなくなれ。』また、『その務めは、ほかの人が引き受けるがよい。』」　教会の歩みは、いつも順風満帆ではありません。人間の弱さや失敗、裏切り、痛み、罪が歴史の中に刻まれているのでしょう。初代教会も例外ではありませんでした。イエス様に三年間従った弟子の一人、イスカリオテのユダがイエス様を裏切り、悲劇的な最期を迎えたことは、１１人の弟子たちにとても深い傷を残しました。イエス様は１２人の弟子を選ばれました。しかし、イスカリオテのユダはイエス様を銀貨３０枚で売り渡し、死んでしまいました。ペトロは、問題を正直に見つめ、神様の前に差し出したのです。ペトロはイスカリオテの裏切りを隠しませんでした。弟子たちは、ユダは「なんて奴だ」と感情的になるのではなく、み言葉に基づきました。聖書に照らして、「その務めは、ほかの人が引き受けるがよい。」という状況を理解したのです。神様の言葉は、ユダの裏切りさえも見通していたのです。人の罪や失敗をも、神様は救いの歴史の中に組み込まれるのです。それは、決してユダの裏切りの行為や失敗、罪を肯定するものではありません。しかし、私たちの失敗や罪が神様のご計画を妨げてしまうということは決してないのです。神様がご計画された救いにみ業や神様のみ業は、ユダ一人の行動によって、左右されるということはないのです。私たちの人生や信仰生活においても、後悔や失敗があり、罪を犯してしまうこともあります。しかし、神様は後悔や失敗、罪というマイナスの状況さえも用いて、神様にとってはみ業を進めるためには妨げとはならずに、私たちを正しく導き、教会を建て上げられ、神様のみ業を勧められるのです。神様の働きは、ユダの失敗でストップしないのです。終わってしまわないのです。残された者、１２０名の者たちを通して勧められていくのです。キリスト教会は、正しく、完全な人々によって建てられるのではありません。弱さを抱えた者、失敗した者、傷ついた者が、 罪を犯した者が悔い改めて、イエス様の十字架と復活を通して赦された者が、ペトロがそうであったように、神様の愛と恵みによって立ち上がり、再び用いられていく共同体なのです。神様のご計画、御業は、人の失敗や罪を超えて進んでいくのでしょう。だからこそ、私たちは、どのようなマイナスを経験しようとも、神様にあって、イエス様にあって、希望をもって歩むことができるのです。

三、人間の知恵や経験よりも祈りを通してイエス様に信頼する

２１節、２２節には、「そこで、主イエスがわたしたちと共に生活されていた間、つまり、ヨハネの洗礼のときから始まって、わたしたちを離れて天に上げられた日まで、いつも一緒にいた者の中からだれか一人が、わたしたちに加わって、主の復活の証人になるべ

きです。」」とあります。リビングバイブルには、「だから今、ユダの代わりにほかの人を、イエスの復活の証人に選ばなければなりません。選ばれる者の資格ですが……、何と言っても、初めから私たちと行動を共にしてきた人でなければいけません。そう、イエス様がヨハネからバプテスマを受けて以来、別れを告げて天にのぼられるまでの間、ずっと私たちといっしょにいた人です。」」とあります。最初から弟子としてふさわしい人は一人もいなかったでしょう。ペトロは、選ばれるべき人は能力や賜物がある、できる人というのではなくて、イエス様と共に歩んだ人、イエス様の復活の証人であることを語りました。教会の役員や教会学校の教師、あるいは様々な奉仕に携わる人々は、どれだけ長く教会にいるか、経験を積んでいるか、能力や才能があるかというよりもイエス様と共に歩んでいるのか、ということが問われるのだと思います。私たちは、どのような奉仕を担うにしても、「私はイエス様の証人として生きているか」ということが問われているのだと思うのです。２３節には、「そこで人々は、バルサバと呼ばれ、ユストともいうヨセフと、マティアの二人を立てて、」とあるように、１２番目の弟子の候補者は２人に絞られました。２４節、２５節を見ると、「次のように祈った。「すべての人の心をご存じである主よ、この二人のうちのどちらをお選びになったかを、お示しください。ユダが自分の行くべき所に行くために離れてしまった、使徒としてのこの任務を継がせるためです。」」とあります。弟子たちは、自分たちの考えや人間的な何かで選ぼうとはしませんでした。聖書的に見ると、「バルサバと呼ばれ、ユストともいうヨセフと、マティア」とあるように、「バルサバと呼ばれ、ユスト」の方が、順番的には前です。おそらく、マティアよりも、ユストの方が人間的に見るならば、信仰的で、霊的で、選ばれるとすればユストの方が、というのが大方の見方だったのでしょう。しかし、そのような人間的なもので選ぼうとはしませんでした。彼らは、まず第一に祈りました。何よりも、何をするよりも、祈りを最優先としたのです。「すべての人の心をご存じである主よ、この二人のうちのどちらをお選びになったかを、お示しください。」と。この弟子たちの祈りが示しているものは、１２番目の弟子を選ぶという教会の決断は、神様の働きであって、人間の判断ではないということです。また、神様は私たち人間の心をご覧下さり、知っておられるので、最もふさわしい人をお選びになるということです。また、祈りというものは、私たちの願いや思いをただ押し通すものではなくて、神様のみ心に従うことなのです。２６節を見ると、「二人のことでくじを引くと、マティアに当たったので、この人が十一人の使徒の仲間に加えられることになった。」とあります。「くじを引くと」とありますが、偶然にマティアに当たったというのではなくて、「マティアに当たった」のは神様の御心であるということです。そこには神様が選んで下さったという信仰の告白があるのです。マティアは、イエス様の１２番目の弟子として、神様が選ばれました。とても素晴らしい働きに選ばれたのです。しかし、マティアの名前は、この後、どこにも出てきません。マティアがどのような働きをしたのか。素晴らしい働きであったのか、どうなのかはどこにも記されてはいないのです。これから先、マティアの名前が聖書のどこにも出てきません。働きの内容も記されていないのですが、たとえ、マティアの名前が出て来なくても、その働きの説明がなくても、神様の前には確かに選ばれた尊い器だということです。私たちの教会での奉仕や働き

も、誰に知られなくても、覚えられなくても、神様が、イエス様が知っていて下さる。イエス様が見ていて下さるのです。ですから、奉仕の内容云々ではなく、心から感謝を持って仕えて奉仕をしたいのです。

Ⅲ結論部

ペトロは、イスカリオテのユダの裏切りを隠すことなく正直に話しました。そして、神様の御心に従って１２番目の弟子を選びました。ペトロは、イスカリオテのユダの裏切りの話をしながらも、自分自身がイエス様を三度知らないと否定した、イエス様の対する裏切りを覚え、イエス様に対する裏切りをイエス様ご自身から赦され、愛されたからこそ、ユダの裏切りのことも話せたのだと思うのです。私たちは全ての者が罪人であり、イエス様を裏切った者でしょう。その罪をイエス様は赦して下さるために、十字架にかけられて裁かれ、尊い血を流し、ご自身の体をいけにえとしてささげられたのです。死んで墓に葬られましたが、三日目によみがえらされて罪と死に勝利し、神であることを証明されたのです。イエス様の十字架の死と復活を通して、私たちに犯した罪が裏切りが赦され、清められ、義とされ、魂が生かされて、死んでも生きる命、復活の命、永遠の命が、天国の望みが与えられたのです。罪ある者が赦されて、老若男女が共に集い、心を合わせて、イエス様の約束、み言葉を信じて祈る所に、神様の驚くべきみ業が起こされていくのです。私たちの教会も、イエス様の言葉、聖書の言葉に従う教会、共に集い、心を合わせて祈る教会、神様の言葉、聖書の言葉に基づいて歩む教会を目指して歩ませていただきたいのです。祈りは、人格、人を変え、家族や様々な人間関係を変え、教会を共同体を変える神様の力があるのです。私たちは、定例の祈祷会を大切にして、共に集い、み言葉に信頼して共に祈りをささげたいのです。祈りを通して神様のみ業を体験させていただきたいのです。水を汲んだ僕たちだけが、水が葡萄酒になった奇跡の御業を知って神様を褒め称えたように、共に集い祈った者だけが神様のみ業を知ることができるのです。２０２６年の全ての神様のみ業が祈りから始まることを信じて祈り会に参加しようではありませんか。

イエス様の約束の言葉を信じて、遺言ともとれるイエス様の言葉を信じて、同じ所に集い、１２０名の者たちが祈る、そこに約束の聖霊が降り、神様のみ業が進められていくのです。私たち一人ひとりは、キリスト者としてふさわしくないかも知れません。しかし、神様が弟子たちの祈りを通して、神様ご自身がマティアを１２番目の弟子を選ばれたように、私たちが救われるためには、誰かの祈り、多く方々の祈りがあり、何よりもイエス様のとりなしの祈りゆえに、私たちが救われ神様に確かに選ばれたのです。選ばれた者ではありますが、失敗もあり、挫折も経験し、罪も犯します。けれども、イエス様の十字架と復活のゆえに、罪赦されたことを確信し、神様に愛されていることを感謝しつつ、日々神様の言葉、聖書の言葉に触れつつ、期待しつつ、祈りの生活を実践したいのです。この週も、私たちを選び、愛しておられるイエス様が共におられますから、全ての重荷を全てイエス様にお委ねして、お任せして、イエス様と共に歩んでまいりましょう。